



TITLE:

師を悼む(追悼高松英雄名誉教授)

AUTHOR(S):

水谷, 昭

CITATION:

水谷, 昭. 師を悼む(追悼高松英雄名誉教授). 京都大学結核胸部疾患研究所紀要 1980, 13(1/2): 4-6

ISSUE DATE:

1980-03-31

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/52183>

RIGHT:

師 を 悼 む

水 谷 昭

(元細胞化学部助教授)

今、ここに恩師高松英雄先生の遺影を前に置いて追悼の一文を草しようとする時、私の心には大きく空洞があき、そこを木枯しが吹き抜けて行くような気持を抑えることができません。それは、まさに親を喪った時に永らく身にまとわりついて離れなかったあの虚脱感でもあり、もし、神というものが存在するならば、その前に跪いて懺悔に近い告白をしたいという衝動に似た心の昂りに通ずるものがあります。

高松先生は昭和54年11月6日、午前10時15分、胸部研4階の病室で静かにその生涯を終られました。現在でも、胸部研における大きな研究テーマの一つであり、高松先生御自身も取り組まれた肺癌が先生の体内にその姿を表わしたのは54年2月のことでありました。他の症状で京大病院内科に入院され、偶然撮影されたレ線像には、非情にも右葉に原発巣、左葉にはその転移巣が写し出されて居りました。その写真は直ちに佐川先生に届けられて診断が確認され、しかも、現在の医学では既に治療不可能であることが判明致しました。時あたかも、愛嬢の結婚式を1週間後に控えてのことで、まことに皮肉な巡りあわせというほかに、知る者ひとしく暗然たる思いに捉われたもので御座います。以来、8ヶ月余り、御家族をはじめ、関係の方々の懸命の看護と、不治の癌に浸された人に対する特有の、あのやりきれないような、ときには虚無感にすら捉われる配慮が続きました。しかし、病理学者である先生は発病間もなくから事態を察して居られたようで、春には遠く九州での同窓会に参加され、それも何時にも似ず御自身で乗物の手配までして赴かれたことなどから、ひそかに旧友との訣別をされたのではないかと後に御遺族から洩れ承りました。

思うに、先生は自らセロを演奏し、こよなく音楽を愛する豊かな感受性と、キリスト教の愛の精神をうちに秘めながら、科学者としての冷徹な思考から、かたくななまでに自らの枠を守り通されました。「巧言令色鮮し仁」の戒を守って多辨を好まず、かつ、策を弄せず、それ故にかえって人から誤解をうけ、自らも深く傷かれたことも再度ならず拝見しております。そのような場合にも、外に発散することは余りされず、多くは御自身の胸の中に抑えこんで居られたようで、淋しがり屋でありながら、誇り高く、矜持を失わず、それだけに余計傷が深く内攻したのではないかと推察して居ります。そうして、来る者を拒まず、去る者を追わず、周りの人々に細い心配りをされながらも弧高を守られた生涯ともいえましょう。昭和43年、心臓移植がマスコミを賑わした頃、先生は新聞の教養欄に「心臓移植を弾劾する」と珍らしく激しい調子で2度にわたって長文の投稿をして居られます。そこでは心臓摘出をしたのは殺人行為であるとすら断言して、医のモラルに対する強い主張がみられます。その根底には生命はすべての人に平等であるとの考えが横たわり、医師が人の生命を扱う日常性の中で、功名心にかられた誘惑に陥ることへの厳しい警鐘を発せせられたものでした。これは漸く大学紛争が激化する中での先生の心の昂りの現われでもあったのではないのでしょうか。

私が高松先生に最初にお会いしたのは昭和29年4月のことで、先生が結研病理学部の主任として赴任された時、学生時代から結研病理に出入りしていた私を、前任の家森先生が紹介して下さいました。その時の第一印象としては「川端康成!!」とはっとしたことを鮮やかに思い出します。当時を振り返ってみますと、先生は研究室のスタッフは勿論、大学を卒業したばかりの私までも非常に大切にして下さいました。それは、戦後母校を失い、混乱期の遍歴から漸く先生の郷里でもある京都に研究の場を見出されて、研究室の設営に励まれた時期であり、金や設備などよりも、何よりも人を重視された科学者としてのお考えによるものであり、また、先生御自身の経験からの若い頭脳への期待によるものであり、更に、先生のお人柄の反映でもあったと思います。事実、その頃、先生を中心に和気藹々としてお互いのコミュニケーションがよく保たれ、研究への熱気が溢れていたように思います。このような雰囲気の中で研究者としての第一歩を踏み出した私は本当に幸福であったと思います。ただ、以後の25年間、結局、師に対する補佐の任を果さず、また、その御期待にこたえるだけの業績を挙げ得なかった私自身の至らなさに忸怩たる思いで御座います。

ここに改めて先生の御経歴を見直す時、昭和11年に満洲医科大学を卒業されてから敗戦までの10年足らずに発表された論文は、共著を含めて100篇をこえ、しかも、その多くの年月が軍歴に含まれていることを思うと、実に瞠目に値する精力的な御活躍といえましょう。とくに、昭和14年(1939)に日本病理学会雑誌に発表された次の論文

「Histologische und biochemische Studien über die Phosphatase (I. Mitteilung). Histochemische Untersuchungsmethodik der Phosphatase und deren Verteilung in verschiedenen organen und Geweben.

von Hideo Takamatsu.」

は本文はドイツ語で僅か6頁余の小篇ながら、近代酵素組織化学の幕あけを告げる歴史的なものであって、先生が若冠27才の時のことでした。当時、組織化学の芽生えはあったものの、酵素活性を組織切片上に証明するなどということは全く考慮外のものであったのを、先生は見事にその壁を破られて新しい手技を開拓されました。その手技は単にホスファターゼに限らず、多くの酵素を対象となし得るもので、戦時中にも拘わらず、Dr. Takamatsuの名と共に世界中にその原理が認識されました。今日では電子顕微鏡レベルの研究にまで広く応用されて、その発展は止るところを知りません。当時のエピソードとして、先生が若干の口惜しさをこめて言われた次のことは忘れ得ない教訓として残って居ります。すなわち、先生のこの研究の第I報は先年の昭和13年にすでに公表して居られたが、それが満洲医学雑誌に日本語で書かれてあったがために、外国では知られず、翌14年に高松先生とは別個にアメリカで Gomori 博士が同様の研究発表をしたところから、外国では Takamatsu-Gomori とはいわず、Gomori-Takamatsu の方法と呼ばれているということで、後年、先生が京大に来られてから組織(細胞)化学会の創設、育成に奔走され、その機関誌として欧文の専門誌を発行することに情熱が注がれたのも、御自分の苦い経験が土台にあったものと拝察して居ります。priority を生命とする原著論文は必ず欧文でという私の行き方もこの教えによるもので、情報過多の現代でも、日本語で医学論文を書いてよしとすることは学問の自慰に過ぎないといひ得るでしょう。

先生が京大に赴任されてからの主な業績としては、結核の組織発生について繁殖型と呼ぶ概念の導入や、発癌機構における変化の連続説などがあげられます。それらの内容についてここに詳述する余裕はありませんが、いずれも豊富な人体例および実験動物における病理組織の観察を集約して、その一駒一駒に時間の要素を加味しての説でした。内容そのものについては専門家の討論に委ねるとして、その着眼および思考過程の斬新さについては広く自然科学の道を歩む者にひ

としく深い感銘を与えるもので御座います。それは、近年、自然科学の世界にも滲透してきたインスタント文化の流れに厳しく対抗する生き方であったともいえましょう。しかし、先生の業績の第一に挙げられるべきは、矢張りさきに述べた組織化学の開拓者としての歩みでありましょう。酵素組織化学的手技の開発に努められる一方、昭和35年には日本組織化学会を創立し、専門学会として発表の場を設けられました。ガリ版刷りのプログラムで、京大医化学の講堂において呱呱の声をあげた当時は、10万円の金のやりくりにも四苦八苦していたものの、先生の御熱意と、会員の方々の盛りあがりによって「手作りの学会」としての意慾が溢れていたのを懐かしく思い出します。この会は後に日本組織細胞化学会と改称され、現在では会員数1,000名余り、年間会費も1,000万円をこえる規模にまで拡大したのを思う時全く今昔の感が御座います。昭和41年には研究所に我国では唯一の細胞化学部が新設され、先生はその教授に移られました。これは、当時の長石所長をはじめ、関係の方々の御尽力、御支援によることは勿論ですが、何といても高松先生の斯界における実績が高く評価されてのものと考えます。こうした永年にわたる御活躍を背景に、昭和47年には第4回国際組織細胞化学会の会長として、同会議を京都で主催して「Father of Histochemistry」としての花道を飾られたことは先生も御満足であったと思います。その晩餐会の席で、スエーデンの Eränkō 教授が先生を称えて「たかまつのかげをうつしていけのつき」と俳句を披露されたことは今も記憶に新しいところで御座います。

病漸く篤くなられても、最後まで学会のことを案じて居られたようで（とくに今年は学会創立20周年記念大会として京都で開催された関係で余計に気残りであられた様子でした）、11月2日夕、学会が無事終了した旨御報告に参りますと本当に安心された様子が伺われました。そして、会の成功を見届けられるのとはば時期を同じくして容態が悪化し、師の久保久雄先生（54年11月2日歿）の後を追うように息をひきとられた次第で御座います。

最後にお伺いした時、その別れ際に先生のお口から洩れた言葉は「あ・り・が・と・う」でした。「有難う御座いました」これはまさに私が25年間の思いをこめて最後に先生に申しあげたかった言葉で御座います。

先生、有難う御座いました。安らかにお眠り下さい。